第２章

他者とつながる

人とつながる―他者とのコミュニケーション

大学生になると、これまで以上に生活空間が広がります。それは、いろいろな価値観をもつ、新しい誰かと出会う機会が広がるということです。みなさんは、どのような人と出会い、かかわりながら成長したいと思いますか？

スポーツ健康科学部　教授　**山浦　一保**

受験勉強からようやく解放され、やっと掴んだ自由な時間…、そう感じている人も多いのではないでしょうか。この“自由な時間”の中で、『未来を拓く』を手にし、このページを目にしたならば、それは今、あなたが間違いなく立命館大学の学生としての時間を過ごしているということ。これから、あなたはこの大学を拠点にどのような出会いを望み、その人たちとどのように関わって自分の将来を豊かにしていきたいかを考えてみましょう。

大学という場所、人とつながる“おもろい”ところ

大学に入ると、それまでとは一味違うと感じませんか？　初年次クラスだけでなく、部活・サークル、アルバイトや地域ボランティアなど、関わる組織が多くなった人がいるかもしれません。高校までと違って、大学では時間的にも空間的にも自由度が高くなるので、広く浅い関係を作るか、狭く深い関係を作るかも自分次第で決まる度合いも高まっていきます。いずれにしても、大学時代に作る人間（友人）関係は、大学生活そのものを充実させ満足のいくものにしてくれます。そして、あなた自身のその後に、「こんなつながりが！」と思わず言ってしまうような、予期しない展開をみせてくれるようになります。

私たち人間の生活をおもしろく彩り、前向きな原動力を与えてくれる基盤は人間関係です。だからこそ、私たちは新しい環境に入ると、「友人はできるだろうか」と心配し、ケンカをしてしまったときには不快で苦しい思いをし、協力して目標達成できると、この上ない感動を覚えるのです。この時期、新しい人と出会うチャンスを継続的に掴むことができること、その中で親しく腹をわって語れる友人ができることは、みなさん自身のターニングポイントになったり、人間的な成長や知的刺激をもたらしてくれたりします。

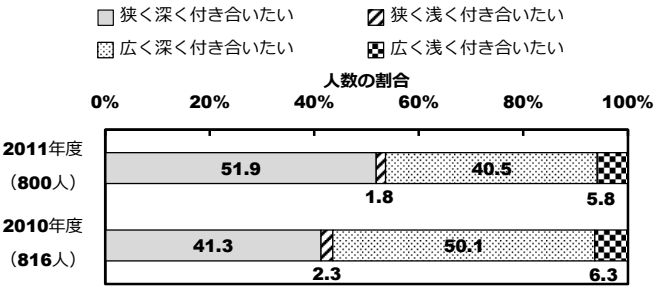
交流する相手は、あなたと似ている人？それとも違う人？

あなたが精力的に活動するほど、出会いや学ぶチャンスが増えます。そこにいる相手と話をしてみて、「自分の考え方や価値観、物事に対する取り組み方が似ている」と思えば、私たちはその人のことをもっと知りたいと思い、仲良く付き合おうとします。問題は、「自分とはちょっと違う、全く違う」と感じたときです。私たちは、このような異質な他者と話を合わせ理解し合うには時間も心理的負担も大きいので面倒に感じ、いずれ意見が衝突してしまうだろうと予想しがちです。そのため、異質な他者とは距離を置き、疎遠な関係にしてしまいます。

参考文献

増田直紀『私たちはどうつながっているのか―ネットワークの科学を応用する』中公新書　2007年
マーク・ブキャナン・阪本芳久（翻訳）『複雑な世界、単純な法則―ネットワーク科学の最前線』草思社　2005年
山岸俊男『「しがらみ」を科学する―高校生からの社会心理学入門』ちくまプリマー新書　2011年

しかしながら、この顔見知り程度の異質な他者こそが、あなたが抱える問題解決の突破口を開き、飛躍させてくれる存在なのです。グラノベッターという著名な社会学者は、ネットワークが開放され、互いが緩くつながっていることに思いがけない好機が存在するという説とそれを裏づけるデータ（例えば、転職の成功は、遠い知人からの「軽い気持ちでの紹介」「何気ない情報」がきっかけとなったケースが多かった）を提出し、話題になりました。身近で普段から情報交換をしている友人や家族は、自分の意見に共感してくれることが多いので安心感を与えてくれます。しかし同時に、「似たような話ばかり…マンネリ化してきた」と感じることも、次第に増えてきます。それは、長く付き合っている恋人との関係を考えてみれば分かりやすいかもしれません。閉じた関係だけで、いつまでも出会ったころの刺激や新鮮さを保つことは案外難しいものです。



友人との付き合い方についての考え方

出典：大学生意識調査プロジェクト FUTURE2011
「震災後の日本と、自分の将来に関する意識調査」

その一方で、異質な他者・自分と関わりの薄い知人は、あなたとは異なる世界で、異なる価値観を持って生活をしているので、あなたにとって新奇で有用な情報や人脈などを含んだ世界を提供してくれます。例えば、いつでも、どこでも、誰とでもつながることができる SNS では、見知らぬ人からの返信にハッと気づかされたという人もいることでしょう。その意味では、SNS は、現代に生きる私たちが、異質な他者と関わることを求め、その魅力を感じ取って発達させてきた手段の１つと言えそうです。身近な友人との緊密な関係を築くこと、遠い知人と緩やかにつながり続けること、それぞれの存在が私たちの生活や成長を支えてくれるのです。

多様な他者・友人との関わり

SNS の普及によって、今や、他者と関わる範囲は広く、また手軽につながれるようになりました。一方で、いろいろな価値観をもつことが許され、それぞれの価値観が重要視される社会になるほど、トラブルや対人葛藤を生じさせる可能性も高まっています。そのため、私たちは、その事態から自分の身を守って快適な生活を送ることができるように、私たち自身で判断し調整することが強く求められています。相手と、どのような場面で、どのくらいの距離感を保つのがお互いにとって快適か、そして一番伝わり合う言葉は何かを探しあてるためにコミュニケーションをとるのです。多様な十人がいれば、十通りの関わり方が存在するはずです。これからの時期、人間関係が広がる中で、相手と一緒にコミュニケーションのスタイルを創り、そのレパートリーを増やしていってください。

話し合ってみよう

タイトル	概要と目的	web補助資料
自分と相手	今までをふり返って、印象に残っている出会いにはどのようなものがありましたか。その人との関わりから何を学びました（学んでいます）か。	有
おひとりさま	どのような「おひとりさま（ひとり○○）」行動をやったことがありますか。あなたがその行動を、友だちと一緒のときよりも、積極的、あるいは消極的にとる理由は何でしょうか。	有
友人とのかかわり方	想像してみてください。あなたは、毎回講義に出席し、ノートもしっかりとっています。試験が近づいたとき、出席率の悪い友だちがあなたにそのノートを貸してほしいと言ってきました。そのとき、あなたは何を感じ、どう対応しますか。思いつく限り、できるだけたくさん出してみましょう。	

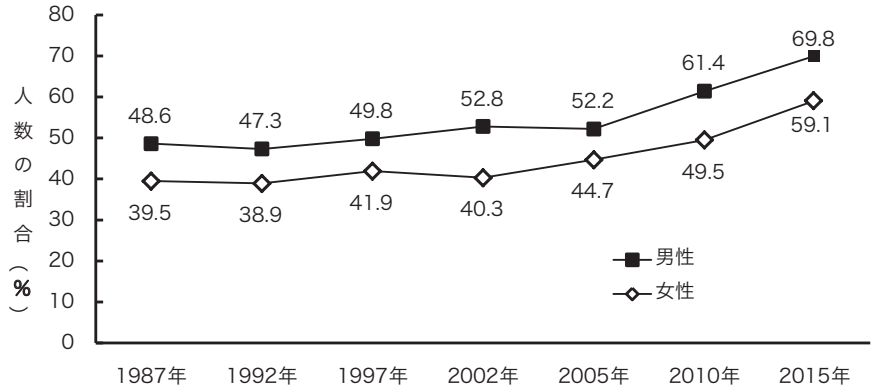
多様なつながり―恋愛とジェンダー

最近の若者たちはどうも「恋愛絶対主義」に振り回されすぎているように思えます。そもそも恋愛って何なのでしょう？ここでは、人間関係のバリエーションのひとつである恋愛について考えてみましょう。

人間科学研究科　教授　**村本　邦子**

恋愛は必須アイテム？

学生のみなさんと恋愛について話してみると、びっくりすることがたくさんあります。そのなかのひとつに、恋人がいないことはとても不名誉なことで、「どんな相手でも、いないよりいる方がまし」という考え方があります。かつては、「結婚してようやく一人前」という考えがあったのに対し、今は、結婚が絶対でなくなったぶん、「恋人がいてようやく一人前」と考えられるようになったのでしょうか。実際には、恋人がいない若者は増加傾向にあると言われています。18歳から34歳の男女を対象とした社会保障・人口問題研究所のアンケート調査(2015)によれば、男性の７割、女性の６割が「交際している異性がいない」と答えています。もっとも、「交際している同性」についての調査はなされていませんね。



18～34歳の独身の男女のうち
「交際している異性がいない」と回答した人の割合

出典：社会保障・人口問題研究所アンケート調査2015年

恋愛はいつの時代も同じように存在していたと考えられがちですが、実はそうでもありません。古代ギリシャの恋愛は男性同士のものでしたし、中世フランスの宮廷恋愛は騎士から既婚女性に対するプラトニック・ラブ(性的関係を介在させない精神的なもの)でした。愛と性と結婚を一体とする考えはロマンチックラブ・イデオロギーと呼ばれますが、当事者同士の合意、排他的な一夫一婦制、性別役割分業を前提としており、今では古めかしいものと感じられるかもしれませんね。最近の特徴としては、男女間に友情が成り立つと考える割合と、恋人や夫婦関係に性関係を必須と考えない傾向が増加しているようです。こう考えると、いろいろな疑問が浮かんできますね。恋愛っていったい何なんだろう？　男女のことなのか、性関係を伴うものなのか？友情とどう違うのか？結婚と別のものなのか？…などなど。

参考文献

青野篤子・赤澤淳子・松並知子(編)『ジェンダーの心理学ハンドブック』ナカニシヤ出版　2008年
江原由美子・山田昌弘『ジェンダーの社会学入門』岩波書店　2008年

多様なあり方を受け入れよう

フロイトは「解剖学は宿命である」と言いましたが、1970年代、性差は生物学的性差を表す「セックス」と、社会的・文化的性差を表す「ジェンダー」に分けられました。1980年代後半になると、生物学的性差は完全に二分できるわけではなく、ジェンダーとセックスの区別自体が不確かなものであることがわかってきました。さらに、性的アイデンティティや性的志向性という軸もあり、現代では、ジェンダーもセクシュアリティも人の数だけ多様にあることが認められています。このような現実に対し、「相手が誰でもどんな関係でもとりあえず恋人がいればよし」という時代が決めたワンパターンに自分をはめこむのはつまらないと思いませんか。それにはめられた相手も迷惑です。

仮に自分にとってときめく恋愛相手がいたとして、その相手も自分と同じ恋愛観を持っているかどうかは疑問です。昔は、「女性が男性の部屋に入ったら性関係を OK したと同じことだ」などという考え方もありましたが、現代では、そんな勝手な思い込みによって強引に性関係を押しつけた場合、犯罪とみなされます。「相手のことが好きで、一緒に過ごしたいけど、性関係は求めていない」、「異性であっても、恋愛ではなく友情を感じている」ということもあります。相手はみかけと違う性アイデンティティを持っているかもしれませんし、性的志向も自分とは違うかもしれません。

一方的にときめいているだけでなく、好きな相手に一歩近づき、親密な関係を形成していきたいと思うのなら、まずは互いを知り合う必要があります。相手は何が好きで、何が嫌いなのか、どんな価値観を持っていて、親密な関係に何を求めているのか。合意できない場合には、折り合いをつけたり、何かをあきらめたりすることも求められます。マスコミはすぐに恋愛マニュアルのようなものを作りたがりますが、好きな相手ができたとき、相手にも自分を好きになってもらって、自分の頭の中にある恋人関係のパターンへ持ち込むテクニックを身につけたからと言って、恋愛がうまくいくわけではありません。なぜなら、それは相手の人となりを理解し、自分と相手の関係を築いていくプロセスとは無関係だからです。

喪失の悼(いた)みを越えて成長する

上手に別れることも大切でしょう。「いったんおつきあいを始めたら、相手の許可を得るまでは別れてはいけない」と考える人が多いのも、最近の若者たちの特徴です。基本的に、恋愛関係は双方の合意に基づくものですから、片方にその意思がなくなればおのずと解消されるものです。少なくとも、制度である結婚は、破たん主義(責任の有無を問わず、関係が破たんすれば結婚も破たんするという考え方)へと向かっています。どんなに好きな人であっても、自分とは違う人間ですから、自分の思い通りはなりません。「二人の人間が愛し合えば、ハッピーエンドはあり得ない」とはヘミングウェイの名言ですが、永遠に思い通りにならないのが恋愛です。

恋愛は大切な要素として人生に含まれているかもしれませんが、人生は、もっともっと他に、たくさんの大切な要素から成り立っています。恋愛してもしなくても、失恋してもしなくても、他者との関係に自分を開き、コミュニケーションを通じて理解を深めていく、あるいは別れや喪失を受け入れる経験を通じて、より豊かな大人へと成長していくことができるでしょう。そんなチャンスに恵まれた学生時代の人間関係を大切にしてください。

話し合ってみよう

タイトル	概要と目的	web補助資料
性差の概念	「ジェンダー」に関して、具体的なトピックをひとつ取り上げ、調べたことや考えたことを話し合いましょう(たとえば、性別役割分担は問題か？など)	
恋愛観の多様性	映画、小説、漫画などを素材にして、恋愛観や恋愛関係が多様であることについて話し合ってみましょう。	

異文化理解のためのコミュニケーション―多文化共生を目指す社会の一員として

誰もが自分らしくいられる多文化共生社会の実現に向けて、私たち一人一人に役割があります。異文化に対する感受性を高めながら、文化的多様性を尊重するコミュニケーションのあり方について考えてみましょう。

国際教育推進機構　教授　**堀江　未来**

多文化共生社会とは

多文化共生社会とは、ここでは、異なる文化アイデンティティ（言語、宗教、民族、職業、性別、性的指向、階層、出身地など）をもつ人々が平和的に共に暮らす社会、と考えます。また、一人ひとりの個性や人権が尊重されること、そして、社会における文化的多様性に対する肯定的な姿勢が前提となります。言い換えれば、みなさん一人ひとりが自分らしくいられる、誰にとっても居心地のいい社会でもあるということです。

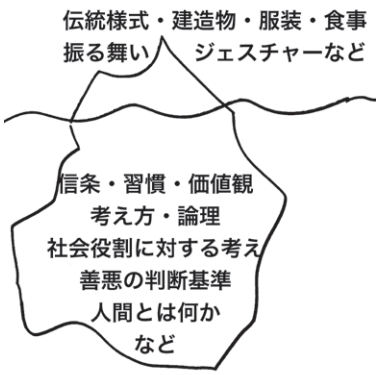
多文化共生社会は、自然に実現できるものではありません。異文化感受性の発達に関する研究の中で、Bennett（1998）は、異なる文化を真に受け入れる姿勢は意識的にまなばなければ身につかないと指摘しています。誰でも、自分の社会で生まれ育ち、その社会で受け入れられる常識や価値観や判断基準を無意識的に身につけます。ですから、異なる行動様式や価値判断などに対して抵抗を感じるのは当然のことです。また、その抵抗感が強く、お互いの違いを脅威に感じた場合、差別的言動による攻撃につながることさえあります。

異文化に対して抱く抵抗感を排除し、文化的多様性への尊重を日常の行動に反映させるためには、一定の経験に基づく知識とスキルと姿勢が必要になります。大学という場所も、外国人留学生をはじめ、文化的多様性に富んだ人々で構成されており、多文化共生を目指す１つのコミュニティです。みなさんが多文化共生に向けて試行錯誤をしながら経験の幅を広げる絶好の環境といえます。

異文化への気づきを高める

「異文化を尊重しよう」と言うのは簡単ですが、実際、どうすればいいのでしょうか。

ここで、異文化という概念を理解するためによく使われる「文化の氷山モデル」を紹介します。氷山の見える部分は全体のほんの一部で、水面下にある大きな見えない部分で支えられています。「文化」も、見える部分と見えない部分で構成されています。見える部分は、その文化の表面的な部分で、旅行者が短期滞在で楽しむのはこの辺りでしょう。一方で、見えない部分には、より複雑で奥深い世界があり、それらが複合的に見える部分の成り立ちを支えています。



文化の氷山モデル

この氷山モデルを意識するだけでも、異文化接触の様々な場面を客観的に分析し、多様性への感受性を高めることができます。例えば、授業中、外国人留学生ばかりが活発に発言をして、日本の学生

参考文献

G・ホフステード『多文化世界―違いを学び共存への道を探る』有斐閣　1995年
Bennett, M.J. (ed). (1998). Basic Concepts of Intercultural Communication: Selected Readings. Intercultural Press.

が黙っているという現象をよく見かけます(見える部分)。そのため、留学生は、日本の学生は自分たちとコミュニケーションを取る気がないと解釈する一方、日本の学生は、留学生に対して、自分たちに話す機会をくれないという不満を経験します。これは双方にとって、前向きなことではありません。

では、この現象の「見えない部分」にはそれぞれ何が隠れているのでしょうか。授業中このテーマで議論してみたところ、日本の学生から「私は高校までの学校教育の中で、議論というものを見たことがない。だから、意見はあるけどそれをどう表現したらいいかわからない」という意見があり、その場にいた留学生を驚かせました。対してアメリカ人学生が「私たちは、教室で常に発言を求められてきた。癖になっているから黙っている方が苦しい」と説明しました。つまり、教室での態度の違いは、お互いのやる気や気遣いの差によるのではなく、これまで経験した学校文化の違いということに気づいたのです。さらに話は、各国学校教育制度、先生・学生の役割の暗黙のルールなどに展開しました。これは「見える部分」に対してお互いに勝手な解釈・批判をしている段階から、「見えない部分」に一歩踏み込んで、お互いの行動の意味を理解し、共に学ぶ協力関係に結びついたコミュニケーションの例です。

多文化交流授業でのディスカッション

私たちは異文化に接するとき、つい「見える部分」を自分の基準で「勝手に」判断する傾向があります。しかし多文化環境においては、そういった判断を保留し、相手の「見えない部分」に隠された価値観や考え方を掘り起こすことをお勧めします。「あれ？おかしいな」と思った時がチャンスです。自分の常識をいったん手放して、相手の氷山の見えない部分に意識を向けてみましょう。

コンフォート・ゾーンから飛び出そう

とはいえ、自分が常識と思うことから距離を置くのは簡単ではありません。特に、１つの文化環境で長く過ごすほど(つまり、大人になるほど)難しくなります。その中で、異文化との出会いは、自文化を客観的に理解するきっかけとなります。自分とは異なる価値観や行動様式などが鏡となって、自分の「常識」が照らし出されます。大学生活の中では、そのような機会をどんどん経験してください。

そして、自分の異文化への感受性を鍛える最も効果的な方法は、コンフォート・ゾーン(自分が慣れ親しんでいて快適な環境)からとび出すことです。海外留学などの機会を活用してぜひ国外に行ってみましょう。その際は、氷山の上の部分の付き合いで終わるのではなく、氷山の下の部分についてもじっくり理解を深められるような滞在を目指してください。また、留学生と共に学ぶ授業の履修もおすすめです。文化的背景の異なる仲間とコミュニティを構築し、何かを共になしとげるのは簡単ではありませんが、そのプロセスで得られる経験と知識とスキルは、みなさんを一生助けることになるでしょう。何かの選択に迷ったときは、「コンフォート・ゾーンじゃない方を選ぶ」だけでも、みなさんの人間性が鍛えられ、多文化共生社会の一員として役割を果すための大きな一歩となりえます。

シャルジャ首長国からのゲストスピーカーと共に

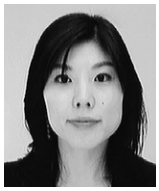
話し合ってみよう

タイトル	概要と目的	web補助資料
文化的価値志向の多様性	文化的に異なる価値観について、自分自身を振り返りながら考えます。	有
あなたの文化アイデンティティ	文化アイデンティティは、国籍や言語だけで形成されるのではありません。自分自身の文化アイデンティティを多面的に掘り下げてみましょう。	有

その恋愛って楽しい？―人とかかわることの素晴らしさと難しさ

大学生になると、多くの人が「デート」を経験するようになります。どのようにしたら、自分も相手も楽しいつきあいができるのでしょうか。一度、自分の恋愛観や人とのつきあい方を振り返ってみましょう。

産業社会学部　教授　**斎藤　真緒**



恋愛プレッシャー

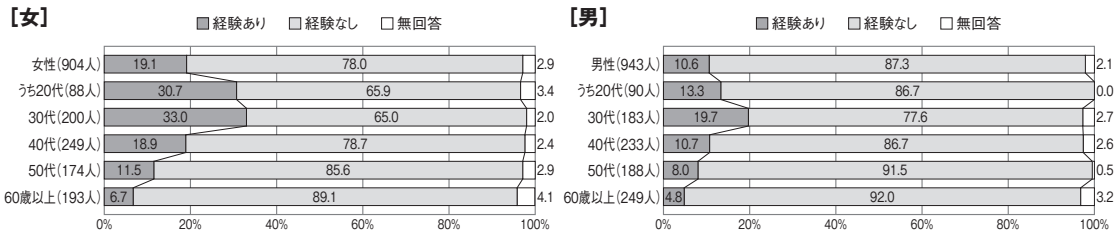
マンガ、映画、小説、雑誌、あらゆる媒体を通じて、たくさんの「恋愛」ストーリーが流布しています。とくに多感な10代20代は、「恋愛しなきゃ」という強いプレッシャーが発生しやすい時期です。「恋人がいないと出遅れちゃう」、「性経験がないと遅いと思われる」といった漠然とした不安から、恋愛をはじめる場合が少なくありません。

人を好きになると、とても幸せな気分になれます。恋愛は、人と深くかかわることの素晴らしさを私たちに教えてくれます。しかし同時に、人と深くかかわることは、とても難しいことでもあります。恋愛以外のことがすべておろそかになってしまう、相手のすべてを知りたくなって束縛したくなる、嫌われたくないから嫌なことでも断れない…。恋愛感情は、時に冷静な判断力を弱まらせ、相手や自分を傷つけてしまったり、自分自身の生活・人生設計や周囲とのつきあいを大きく変えてしまう可能性があります。

「デート DV」って何？

「デート DV」という言葉を聞いたことはあるでしょうか。DV とは「Domestic Violence」の略称で、家庭内で生じる暴力のことです。デート DV とは、同居の有無に関わらず、結婚していない恋人同士での暴力であり、特に、10～20代の結婚経験のない若者のカップル間で生じる暴力を指します。最近では、テレビドラマや新聞などでもとりあげられるようになってきました。ストーカーや傷害・殺人事件など深刻なケースがある一方で、とても身近な問題として、デート DV がひろがっている現実があります。最近の調査では、20代で交際経験のある女性の23.4%、男性の11.7% が、何らかの暴力被害にあったことがあると回答しています。別の調査では、男性の被害が女性より多いという結果も出ています。

DV という言葉は、殴る・蹴るといった、身体的暴力のイメージを連想させますが、実は DV には、さまざまな形態があります。言葉によって相手を追い詰めて深く傷つける精神的暴力（しばしば「モラル・ハラスメント」ともよばれます）や、高級なプレゼントを要求したり常におごらせるといった経済的暴力も含まれます。デート DV とかかわって一番気をつけなければいけないことは、相手の人間関係や行動を



交際相手からの被害経験の有無（性・年齢階級別）

出典：内閣府「男女間における暴力に関する調査（平成26年調査）」

参考文献

伊田広行『デート DV と恋愛』大月書店　2010年
遠藤智子『デート DV ―愛か暴力か、見抜く力があなたを救う』ベストセラーズ　2007年

監視・制約するといった社会的暴力です。具体的には、一方的に行動や予定を報告させる、常に自分の都合に合わせるように要求する、相手のスマートフォンを勝手にチェックして友達付き合いやサークル活動を制約するといったことが含まれます。とくにスマートフォンは、相手の行動を監視しプライバシーを奪う手段として利用されてしまうことがあります。たとえば、別れた腹いせに、交際中の親密な画像をインターネットに投稿をする行為は「リベンジポルノ」と呼ばれ、昨年から取締りの対象となりました(「私事性的画像記録の提供等による被害の防止に関する法律」)が、一度インターネット上に投稿されてしまった画像を完全に消去することは難しいとも言われています。スマートフォンには便利な機能が数多くある反面、交際相手との「距離」のとり方を大きく変容させています。24時間つながることが可能になった反面、そのことが半ば強制になったり、相手のプライバシーの隅々まで知ることが可能になりました。

「見えない」暴力の怖さ

相手の行動を監視し支配する「見えない」暴力の怖さは、どこからが暴力かを断定することができないというところにあります。つきあいはじめた頃は、お互いに浮かれて毎日長電話をしたり何通もメール交換をすることもあるでしょう。しかしいつのまにか、常に相手の予定や機嫌をうかがわなければいけなくなり、友達と遊ぶ約束やバイトの予定も立てづらくなるなど、二人の関係が次第に相手の都合に左右されるようになってしまいます。

また、相手に対する愛情は、自分の居心地の悪さを直視することを妨げてしまうこともあります。相手にとって都合のよい束縛を「愛情」と履き違え、恋愛に辛さはつきものと思いこんでしまい、暴力を過小評価し、気づかないふりをすることがあるかもしれません。

はたしてこうした関係は、本当に自分や相手を幸せにしてくれるのでしょうか？

自分を尊重する、相手を尊重する

もちろん、今は恋愛以外に打ち込みたい大切なことがあるという人もいるでしょう。恋愛に対する比重の置き方も人それぞれです。あなたにとって、他者との居心地のいい「距離」とはどのようなものでしょうか。それは相手にとっても居心地がいいといえるでしょうか。

「親しき仲にも礼儀あり」ということわざがあります。好きだからといって、自分の要求ばかりを相手に押しつけていないでしょうか。相手の友人関係や将来の可能性を狭めてしまうことを正当化してしまっていないでしょうか。逆に、ついつい過剰に相手に合わせて、自分が言いたいことややりたいことを我慢してしまっていませんか。相手のことが好きであっても、きちんといやなことはお互いに NO と言い合える人間関係がつくれているでしょうか。

恋愛において、「相手のことをもっと知りたい」、「もっと一緒にいたい」という感情がわきあがってくることはごく自然なことです。しかし、お互いにとって楽しい恋愛にするためには、相手に対する愛情だけではなく、自分自身を大切にすることが重要なのです。そのうえで、お互いの意見や考え方の違いを尊重し、それぞれ認め合っていく作業がとても重要になります。

このことは、恋愛だけではなく、家族や友人関係にもあてはまるでしょう。一度、あなた自身の恋愛観や人との付き合い方を振り返ってみませんか。

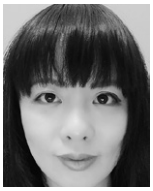
話し合ってみよう

タイトル	概要と目的	web補助資料
愛情と「距離」	スマートフォンによって、恋人と24時間離れていても簡単につながることができるようになりました。しかし、相手との心地よい「距離」は、人によって違います。スマホによって、恋人との距離がどのように変化したか(メリット・デメリット)を出し合い、お互いが心地よい「距離」を保つにはどのような工夫が必要か話し合いましょう。	
人とのかかわり方	上記の議論を踏まえて、恋愛に限らず、家族や友人関係など親密な相手との適切なかかわり方について話し合いましょう。	

「大人として」心身を守る―多様な機会と大学生活

大学では、多様な機会がみなさんを待っています。学びの機会、楽しむ機会、迷う機会、立ち止まる機会、そしてつまずく機会、これら一つ一つは、みなさんに成長のチャンスを与えてくれる一方で、時に心身をおびやかす危険な機会も紛れ込んでいることがあります。このページでは、多様な機会があふれる刺激的な大学生活を前にわくわくしているみなさんが、さまざまな機会を「大人として」見極める力を養い、みなさんの心身を守る方法について考えてみましょう。

学生オフィス・障害学生支援室　学生支援コーディネーター　**片山　愛**

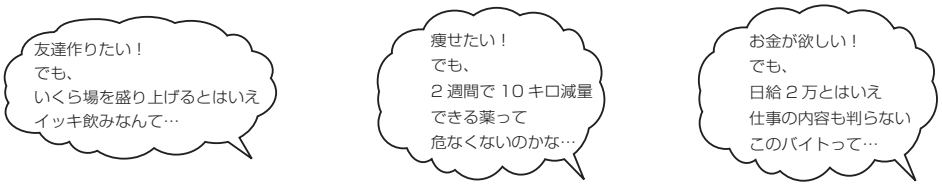


多様な機会と選択する機会

授業、バイト、留学、ボランティア、読書、サークル、飲み会、インターンシップ、旅、そして「何もしないこと」。大学生活は、このように多様な機会にあふれています。みなさんのことをよく知る「大人」が適切な機会を選択してくれた時代を卒業し、みなさんがそれぞれ思い描く「大学生活」のイメージにあわせるように、これらの多様な機会をあれこれと試着することが、大学生であることの醍醐味ともいえます。もちろん、「ちょっと似合わない」機会を試着してしまうこともあるでしょう。それも、自分にふさわしい機会を選択する感性を養う大切な体験です。みなさんそれぞれの将来像や理想の自分に近づくために必要な機会を、時に失敗もしながら発見していきましょう。

危険な機会？

目の前に広がる多様な機会の中には、みなさんの心身を危険に陥れるような機会が含まれていることがあります。自分が求めているもののように思えるけどなんとなくおかしい・・そんな「危険な機会」と遭遇し迷っている先輩方のつぶやきを聞いてみましょう。



こうした「危険な機会」は、みなさんが理想とする「大学生活」を実現するような顔をして忍び寄ってきます。友人を作りたい一心で、場の空気を読みイッキに応じてしまう、その結果を想像してみましょう。痩せて自分に自信を持ちたいとの一心で挑む急激なダイエット、果たしてそれは、本当にみなさんの自信につながるのでしょうか？確かにお金は大切です。しかしこのバイトは、対価を得る手段として安全、またふさわしいのでしょうか？

このように、目の前にある機会を選択した結末が、みなさんの心身の健康、仲間や家族との信頼関係、将来に渡る社会的信頼を著しく侵害することになってしまう場合があります。

「危険な機会」と「必要な機会」を見分ける力を養おう

では、多様な機会の中から、「危険な機会」と「必要な機会」を見分ける考え方を伝授しましょう。

①　常識力

常識力とは、私の常識、仲間や親しい間柄での常識、そして社会の常識を合わせたものをさします。この３つの常識のバランスが著しく崩れるものは、みなさんにとって危険な機会の可能性があります。「それは私にとって普通？」「親や友達は普通と思うのかな？」「社会的には普通と思われるのかな？」、３度

じっくりと自分に問いかけてみましょう。

②　自律力

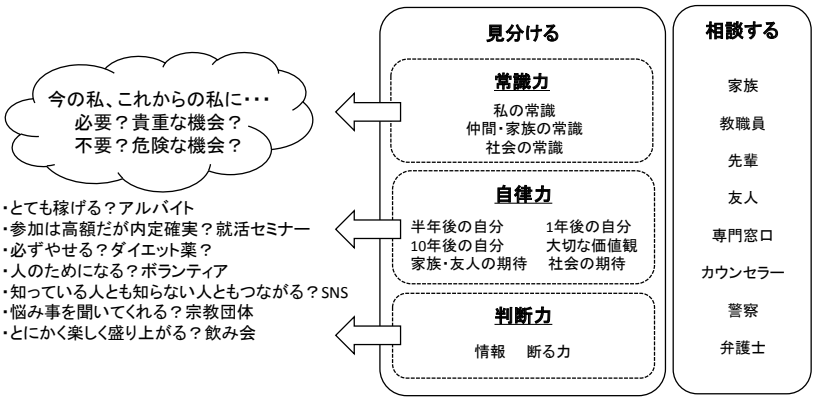
自律とは、自己実現、つまりなりたい自分になるための過程や手段のことです。みなさん自身の価値観は、それぞれの機会の価値をどのように理解するのでしょうか。またその機会は、みなさんが理想とする大学生活の実現や「○年後になりたい自分」になることを、どのように手助けをしてくれるのでしょうか。自分に問いかけてみましょう。

③　判断力

判断力とは「必要な機会」と「危険な機会」を最終的に判別する手段をさします。まずは判断の基本となる情報を入手しましょう。大学生が遭遇しやすい「危険な機会」の情報はニュースや大学などで入手できます。インターネット利用にまつわるトラブル、勧誘、マルチ商法など、みなさんが被害者とも加害者ともなるさまざまな「危険な機会」の実態を正確に知ることが大切です。また、「危険な機会」に対して、みなさん自身の根拠と理由をもって「ＮＯ」と断るスキルも重要です。

「危険な機会」との安全な付き合い方

時には、気づかないうちに「危険な機会」に取り込まれてしまうこともあります。この段階では相談力がみなさんの心身を守る術となります。ここでいう相談とは、正確な情報をもって、みなさんが置かれている状況を客観的に見極め、状況の改善に向けて行動できることを一緒に探してくれる味方に出会うことをさします。まずは、みなさんにとって身近な誰かに取り合えず「話してみる」ことは、相談すべき内容や言葉を整理する重要な機会となります。また、状況の改善に向けて具体的な行動を起こすためには、みなさんを普段からよく知る家族や友人、「危険な機会」の実態をよく知る教職員や専門家など、複数の相談窓口を持つことが大切です。



話し合ってみよう

次のエピソードを読み、話し合ってみましょう。

回生を問わず、いろんな人と仲良くなりたいと思っているＢ君。他大学のメンバーも参加する大きなテニスサークルに入部しました。少しずつ周囲の雰囲気に慣れてきたころ誘われたサークルの飲み会。もっとみんなと親しくなりたいＢ君はもちろん参加を決めました。しかし盛り上がりが最高潮に達したその飲み会では、あちこちで一気飲みが始まりました。「お酒は20歳になってから*」が当然と思っていたＢ君は、ウーロン茶を注文。横にいたいつもお世話になっている、Ａ先輩は、「ジュースみたいなもんだって！ためしてみろよ。」という声をかけられました。まわりでは、みんなが楽しそうにチューハイやビールを飲んでどんどん盛り上がっています。いやだなと思っているＢ君ですが、ここは空気を読んで、次はチューハイぐらい注文したほうがいいのかなと思っています。　※日本の法律では、20歳未満の飲酒は禁じられています

タイトル	概要と目的	web補助資料
心身を守る「大人ルール」を発見しよう	①Ａ先輩がＢ君にお酒を勧める理由やその気持ちを想像し、意見を共有しましょう。 ②Ｂ君は、チューハイを注文しました。その理由やＢ君の気持ち、またＡ先輩の反応や気持ちを想像し、意見を共有しましょう。 ③Ｂ君は、チューハイの注文を断りました。その理由やＢ君の気持ち、またＡ先輩の反応や気持ちを想像し、意見を共有しましょう。 ④「常識力」「自律力」「判断力」を読み、Ｂ君が大人として心身を守るためにできることを考え、意見を共有しましょう。	